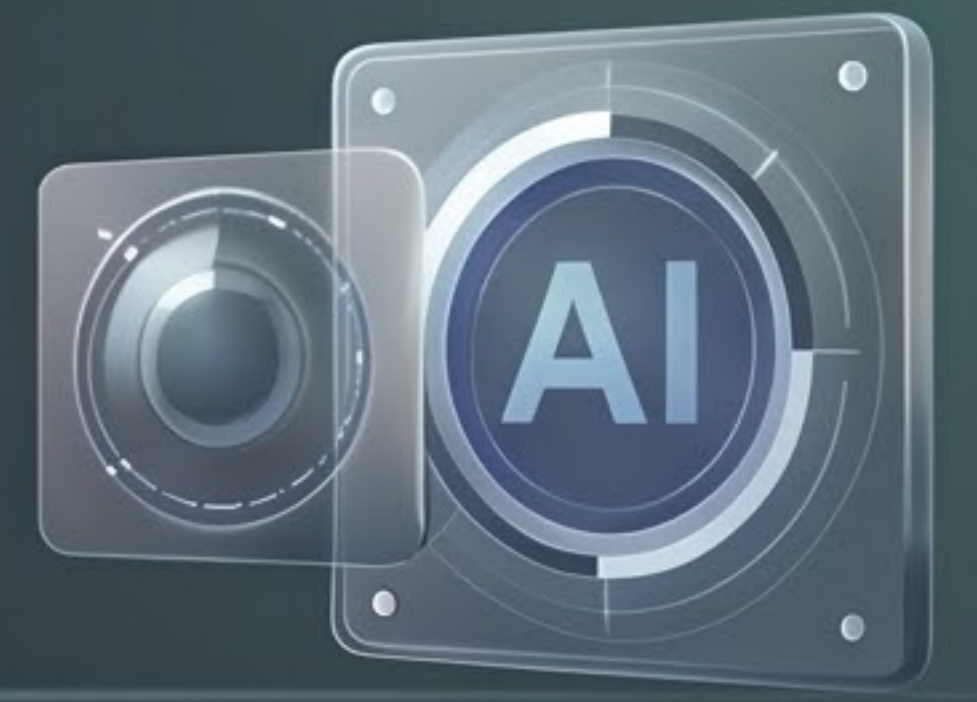




ChatGPT Images 2.0

知財実務ガイド: 進化する機能とリスク管理の要諦

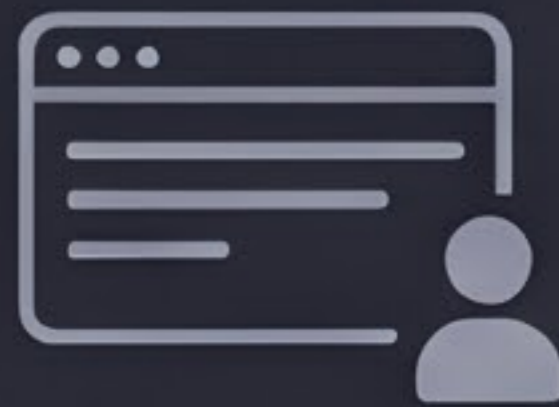


Images 1.x vs 2.0 : 技術的進化と知財への影響

Images 1.x



解像度と柔軟性の向上:
固定サイズだった1.x系



指示追従性と編集の忠実度:
テキスト挿入や特定の顔・IDの
保持能力

Images 2.0



MAX 3040px
MAX 3940px
最大3840px、辺の長さも柔軟に指定可能。
印刷物や高精細なWeb素材への活用が容易に。



revised_prompt (修正プロンプト)
飛躍的に向上。「便利になるほど、既存ブランド
や人物への“寄せ”」が蓄積上認めやすくなる。



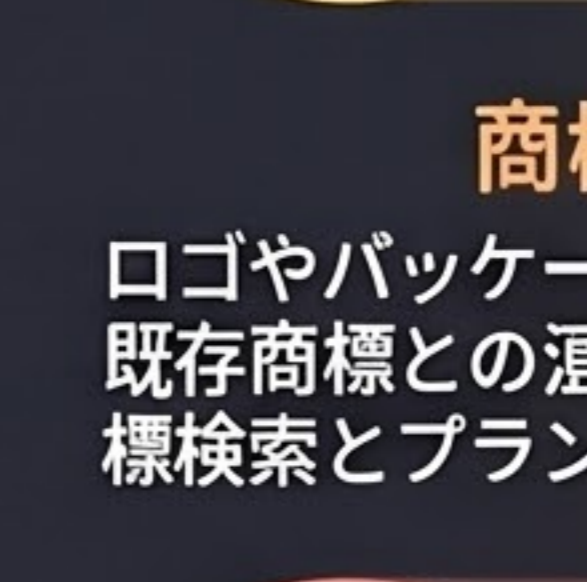
監査可能性 (Auditability) の改善
Responses APIで「revised_prompt (修正プロ
ンプト)」が取得可能に。生成過程の証拠を残
せるようになり、法務レビューの精度が向上。

知財実務における3大リスク領域



著作権侵害リスク

特定の作風や創作的表現が直接模倣できる場合、
日本法下でも優越と判断される可能性。米国で
はThomson Reuters v. Ross判例等で学習デ
ータのフェアユースが厳格化する兆しも。



商標・ブランド類似リスク

ロゴやパッケージ生成の精度が上がったため、
既存商標との混同リスクが増大。公開前の商
標検索とブランド・セーフティ審査が必須。



肖像・パブリシティ権リスク

画像編集の忠実度向上により、特定の個人を想
念させるビジュアルが生成されやすくなって
いる。参照画像の弊害確認がより重要に。

企業が導入すべき「安全な運用フロー」

入力段階: 権利確認とプラン選択



参照画像やプロンプトに
他者の権利物が含まれない
か確認。
学習に利用されない
Business/Enterprise/API
プランの使用を徹底する。

生成・編集段階: 人間による介入



AIの出力をそのまま使わず、
人間が編集・選択方針を明
示する。
「人間の創作専ら」のプロ
セスを記録することで、法
的著作物性を補強する。

公開・保全段階: 証拠のアーカイブ



プロンプト、改訂プロ
ンプト、C2PAメタデー
タ、原本を記録して
保存。盲検や削除要求
に対応できる証拠管理
体制を整える。

日本: 柔軟な学習と出力制限
(著作権法30名の4により学習は原則
適法だが、例外あり。)

米国: 人間中心の著作者性
(2025-2026年の判例でIAI生成部分
への著作権保護は限定的、人間の貢
献が要。)

日本: 柔軟な学習と出力制限
(著作権法30名の4により学習は原則
適法だが、例外あり。)

米国: 人間中心の著作者性
(2025-2026年の判例でIAI生成部分
への著作権保護は限定的、人間の貢
献が要。)

欧州: AI Actによる透明性義務
(学習データの蓄積作成義務や透明
性確保が求められ、ベンダー側への
デューデリジェンスが重要。)